

三陸の海を
放射能から守る岩手の会
ミニコミ通信

第4号

止めよう！ 《再処理》

2005(平成17)年
8月5日発行
連絡先事務局
Oshida方
電話・ファックス
019-623-1636

放射能で海を汚すな！ 水口憲哉教授三陸沿岸リレー講演会 久慈・宮古・気仙地区で準備進む

海洋投棄は 末代までの禍根



海を守るために 各地の動き活発

「再処理工場が操業すれば放射能が流され、三陸の豊かな海が汚される。これは今世紀最大の放射能汚染」と警告を發した、水口憲哉東京海洋大学名誉教授の三陸リレー講演会の準備は、市民の手で順調に進められています。

宮古地区 十漁協が協力

宮古地区では七月七日第二回実行委員会が開催され、漁協関係者や町議など前回より裾野を広げた市民参加で行われました。一日、田村剛一会長、菅野和夫事務局長、有志町議らが山田町内五漁協と重茂、宮古、田老、小本、田野畑の各漁協を訪問し協力を呼びかけました。各漁協では応対した組合長、参事さんなど、

放射能汚染は許せないとして、講演会の成功のために賛助金の負担や動員のための措置を約束しました。

気仙地区 養殖漁家や自然保護運動関係者

高田地区では、七月二十日夜六時から高田市内ふれあいセンターで十余人が出席し実行委員会が開催されました。会では「安全・安心の漁業生産を続けたい、後世に負の遺産を残したくない」などの心情が吐露され講演会を是非成功させよう」と話あわれま

した。代表に千田勝治(広田・漁業士)さん、事務局長に佐藤一男(米崎)さんを選出し、九月二日(金)六時半から、ふれあいセンター和室での開催を決定しました。実行委員とリレー講演会世話人代表の高橋盛佳さん

久慈地区 準備会が始動

久慈地区でも、杉野真紀子(元久慈市議会議員)さん、中野雅幸(野田村)さんを中心に準備会が始動しました。

《守る会》が日本原燃に手渡した質問書への回答は七月二十九日と約束されていたが、《守る会》が面会時間確認のために入れた電話に対して原燃広報担当者は「決裁や様々な配慮のため二十九日には間に合わない」と通告してきた。期日を守ってほしいと強力に要請したが、結局八月五日(金)十一時に回答を受ける事となり、三人の代表が六カ所工場に向かいました。

日本原燃の回答 八月五日に延期

《守る会》が日本原燃に手渡した質問書への回答は七月二十九日と約束されていたが、《守る会》が面会時間確認のために入れた電話に対して原燃広報担当者は「決裁や様々な配慮のため二十九日には間に合わない」と通告してきた。期日を守ってほしいと強力に要請したが、結局八月五日(金)十一時に回答を受ける事となり、三人の代表が六カ所工場に向かいました。

放射能垂れ流し反対署名運動

三陸の海を放射能から守る岩手の会は、「再処理工場からの放射能を三陸の海に流させないことを求める署名」を増田寛也岩手県知事、伊藤勢至岩手県議会議長に提出する運動を開始しました。第一次集約日を九月五日とし、リレー講演会に会わせて圧倒的多数の署名を集め、県政を動かす、六カ所再処理工場からの放射能垂れ流しを絶対にストップさせよう。

署名運動は、原発の数百倍もの放射能を垂れ流す再処理工場の操業開始を中止し、《岩手の宝・三陸の海と漁場》を守るために、増田知事や県議会は最大限の努力を払うべきだという内容です。具体的に次の二点を要求しています。

増田知事は青森県に運転中止申し入れを

一、岩手県民、特に三陸沿岸漁業にたずさわる県民の理解が得られるまで、使用済み核燃料による再

処理工場の運転をしないよう、青森県ならびに日本原燃(株)に申し入れること。

海域の環境影響評価を行うこと

一、三陸沿岸の漁場や海水浴場など、三陸沿岸海域全般の環境影響評価を行うよう、青森県並びに日本原燃(株)に申し入れること。

この署名は趣旨に賛同できる方は誰でも署名出来ます。多くのの方々のご協力をお願いします。

一口解説

《再処理工場の放射性物質》その1 トリチウム

トリチウムは普通の水素より三倍重い水素。天然にもわずかに存在するが、原子炉などで多量に作られる。環境に放出されると酸素と化合して水となり生物の体に取り込まれやすい。体内に入ったトリチウムはベータ線を出し体細胞を傷つける。半減期が12年と長く、普通の水からも分離が困難で、原子力発電所にとってやっかいな物質。原燃(株)が原子力安全委員会などに提出した「六カ所再処理工場事業許可申請書」には1年間の操業で 1.8×10^{16} ベクレルという膨大な量のトリチウムが排出されると記載されている。(N)

書物の紹介



原爆から劣化ウラン弾まで
肥田舜太郎・鎌仲ひとみ著
ちくま新書
定価 六八〇円+税

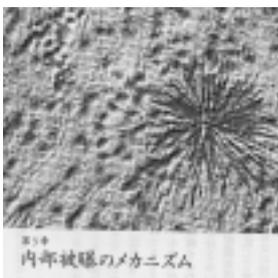
去年盛岡でドキュメンタリー映画「ヒバクシャ」の上映会を開催したが、トクを担当した鎌仲ひとみ監督から著書が送られてきた。原爆医療に長年携わってこられた肥田舜太郎

医師との共著である。この本を一読して、人類が「核エネルギー」に遭遇して以来、核問題を論ずるときに、《人体内部からの被曝》と言う重要な問題が巧妙に隠され、解明されないままにやって来たことが痛感させられる。

原爆反対と言うとき人々は、爆弾さえ破裂しなければ大丈夫という安心感(?)をみたいなものがあつた。しかし、鎌仲ひとみ監督が目にしたのは、「原爆が破裂したわけでもないのに、原爆周辺や湾岸戦争後に低線量放射線障害で倒れ死んでいく人々の実情であつた。肥田医師は、ヒロシマのピカドンには会わなかつたのに間接的被曝をして原爆症で死んでいった人々や、幸い生きながらえながらも脱力感や機能不全などで今なお苦しんでい

る多くのヒバクシャの実態を伝えていく。

「体外被曝」と「体内被曝」は、物事の両面である。呼吸や食物から体に入り込んだ極小の放射性微粒子は、六十兆といわれる人体細胞の新陳代謝の《壮大な世界》に永続的に核エネルギーを放散しつづけ、DNAを傷つけガンや遺伝的障害をもたらす。



《肺組織に入ったフルトニウム粒子》

特に第三章《内部被曝のメカニズム》は中学生にも分かるように、やさしく書かれ、学習書としても最適な好著である。是非一読を。(尚)